

## 矢崎光圀先生略歴・主要業績

### 略 歴

- 大正12年11月29日 山梨県中巨摩郡若草村に生まれる
- 昭和17年9月 成城高等学校（文科乙類）卒業
- 昭和17年10月 東京帝国大学法学部政治学科入学
- 昭和18年12月～20年 兵役につく
- 昭和21年 復員復学
- 昭和22年9月 東京帝国大学法学部政治学科卒業
- 昭和22年10月 東京大学大学院特別研究生
- 昭和25年4月～26年 学習院大学講師
- 昭和26年3月 東京大学大学院特別研究生終了
- 昭和26年5月 大阪大学法経学部助教
- （法経学部、その後、法学部、経済学部に分れた結果、法学部に所属）
- 昭和33年8月 外国出張（ハーヴァード大学35年7月まで）
- 昭和36年5月 大阪大学法学部教授
- 昭和36年5月 日本法哲学会理事

昭和41年8月

外国出張（コロンビア大学42年11月まで）

昭和43年

東京大学より法学博士の学位を受ける

昭和44年9月

大阪大学法学部長（同年11月まで）

昭和50年8月

外国出張（ハトヴァード大学同年11月まで、なお法哲学・社会哲学国際学会連合（IVR）セントルイス世界会議にも出席）

昭和54年～60年

日本法哲学会理事長

昭和56年8月

IVRメキシコ世界会議に出席

昭和58年8月

IVRヘルシンキ世界会議に出席

昭和59年7月

「日本とヨーロッパの法思考」会議（ルツェルン）に出席

昭和60年9月

「リベラリズム」をめぐるシンポジウム（プリンストン大学）に出席

昭和61年～63年

日本学術会議会員

昭和61年

IVR理事会（ヴイマール）に代理として出席

昭和62年3月

大阪大学（法学部教授）停年退官

昭和62年4月

大阪大学名誉教授

昭和62年4月

成城大学法学部教授

昭和62年8月

IVR世界会議（神戸）に出席。同会議組織委員長。この後、IVR理事。この結果、隔年で世界会議（丸印をつける）、もう一つの隔年で理事会に出席することになる。以下に略記すると、昭・63 ポローニア、昭・64 エディンバラ、平・2 グラナダ、平・30 ゲッティンゲン、平・4 パリ、平・50 レイキャビク、平・6 アムステルダム。

昭和64年4月～平成5年 成城大学法学部長（同年3月まで）

平成2年3月 比較法史学会理事長

平成3年8月 I V R 副会長

平成4年3月 学術会議会員推薦管理委員会委員

平成6年3月 成城大学（法学部教授）停年退職

平成6年11月 日本法哲学会名誉会員

### 主要業績

#### I 著 書

昭和28年

自然法（法学理論編第一八巻） 日本評論新社

昭和38年

法実証主義 日本評論新社

昭和48年

法哲学と法社会学 岩波書店

昭和50年

法哲学 筑摩書房

昭和52年

法哲学入門（八木鉄男と共著） 青林書院新社

昭和56年

法思想史 日本評論社

昭和62年

日常世界の法構造 みすず書房

平成2年

法学入門 放送大学教育振興会

II 編 書

昭和42年

現代法思想の潮流 法律文化社

昭和45年

法哲学講義(井上茂と共編) 青林書院新社

昭和48年

演習法律学概論(井上茂と共編) 青林書院新社

昭和56年

近代法思想の展開(恒藤武二教授還暦記念、八木鉄男と共編) 有斐閣

昭和57年

講義法哲学(井上茂・田中成明と共編) 青林書院新社

昭和59年

M. Yasaki, A. Troller, J. Llompart (ed), *Japanisches und Europäisches Rechtsdenken*, Duncker & Humblot,

1984.

昭和62年

Yasaki (ed), *EAST AND WEST-LEGAL PHILOSOPHIES IN JAPAN*, 30 ARSP Beiheft, STEINER, 1987.

平成元年

法哲学的思考(長尾龍一と共編) 平凡社

転換期世界と法(佐藤節子・野口寛と共編) 国際書房

平成3年

P. Sack, C. Wellman, Yasaki (ed), *Monismus oder Pluralismus der Rechtskulturen?*, Duncker & Humblot,

1991.

### Ⅲ 論 文

昭和25年

市民社会と自由の問題(一)・(二) 法律時報二三卷一号、五号

昭和26年

ラートブルフ法哲学における晩年の課題 法律時報二三卷一〇号

合理的市民法と法学的世界観 法哲学四季報九号

昭和27年

戦後ドイツにおける法証主義と自然法論に関する一考察 阪大法学四号

昭和28年

近世自然法と国家権力の問題 法哲学年報一九五三『法と国家権力I』 有斐閣

シュタール、ベーゼラーにおける歴史的法思想の展開(一) 阪大法学七号

昭和29年

シュタール、ベーゼラーにおける歴史的法思想の展開(二) 阪大法学一二号

昭和30年

東ドイツ法理の二、三の動向について(一)・(二) 法律時報二七卷一号、五号

昭和31年

東ドイツの法思想 法律時報二八卷四号

近世ドイツの自然法思想 法哲学講座第三卷『法思想の歴史的展開(II)』 有斐閣

昭和32年

Die Entwicklung der historischen Rechtsgedanken bei Stahl und Beseler, Japan Annual of Law and Politics,

No. 4

Legality and the Right of Resistance, 4 Osaka University Law Review (4 OULR).

法実証主義 法哲学講座第四卷『法思想の歴史的展開(III)』 有斐閣

ケルゼン 木村亀二編『近代法思想史の人々』 法学セミナー別冊

歴史法学派 法学セミナー一四号

法思想の社会的な意味と機能 法律時報別冊

昭和34年

ウェーバー、法社会学（解説）（翻訳の項の内、ウェーバー『法社会学』卷末所収）

昭和36年

法律は法律だというスローガンの意味と機能について（一）（二） 法学セミナー六四号、六五号

昭和37年

ナチスの法律の効力と順法をめぐる論議について 恒藤恭先生古稀記念 『法解釈学および法哲学の諸問題』

有斐閣

政治過程の法的処理とその評価の基準 阪大法学十周年記念号

政治過程の法的処理とその評価の基準（続） 阪大法学四〇・四一合併号

法実証主義の再検討 法哲学年報一九六二『法実証主義の再検討』 有斐閣

On the Discussion of Fidelity to and Validity of Nazi Laws, 10 Osaka University Law Review (10 OULR).

昭和38年

市民社会における法と自由 尾高朝雄教授追悼記念『自由の法理』 有斐閣

Legal Positivism Reconsidered, 11 Osaka University Law Review (11 OULR).

昭和39年

分析法学と法実証主義 法律時報三六卷一号

昭和40年

西洋近代における社会的エートスとしての法思考 法律時報三七卷一号

ドイツにおける抵抗および抵抗権 憲法研究所編『抵抗権』 法律文化社

法、道徳、シュクラリズム 阪大法学五四号

Some Comments on Legal Positivism and Legalism, 13 Osaka University Law Review (13 OULR).

昭和41年

法思想の理論 法社会学年報一八号『法思想の法社会学的検討』 有斐閣

妥当な法律と順法の問題 法哲学年報一九六五『現代法哲学の諸傾向』 有斐閣

法実証主義 岩波講座・現代法13『現代法の思想』

法と市民主義 思想五〇四号(六月号)

Legal Positivism in Japan, 14 Osaka University Law Review (14 OULR).

昭和42年

ホームズ (編書の項目の内『現代法思想の潮流』所収)

昭和43年

Legal Positivism and Authoritarianism in Japanese Legal Tradition, 16 Osaka University Law Review (16

OULR).

昭和44年

法哲学と法社会学 思想五三五号(一月号)

「法規範の分析」についてのおぼえがき 法哲学年報一九六九『法思想の諸相』 有斐閣

フリードマンの法理論 自然法の研究二号

Legal Positivism and Authoritarianism in Japanese Legal Tradition, (contr'd), 17 Osaka University Law

Review (17 OULR).

昭和46年



法の運用における社会通念と経験則 思想五六〇号(二月号)

解 釈 井上茂・渡辺洋三・福田平編『法律学概論』 青林書院新社

法と辺境領域の理論 八木鉄男編『現代の法哲学理論』 世界思想社

判例法と法的推論 法哲学年報一九七一『法的推論』 有斐閣

昭和47年

法社会学と法思想史 法社会学講座第三卷『法社会学の基礎1』 岩波書店

昭和48年

The Word Law and Matters Legal, 20 Osaka University Law Review (20 OULR).

昭和49年

A Glimpse of Persons in the Modern Legalistic World, Equality & Freedom, Oceana Publications, vol. 1  
(later published), 1977.

法社会学講座所収の川島論文に対するコメント 法社会学年報二七号『法社会学の方法』 有斐閣

昭和50年

法 学 (TBSブリタニカ、事典、所収)

昭和51年

ハート、法の概念(解説)(翻訳の項参照)

法と言葉 言語生活(ちくま)三〇〇回記念号

法における形式と言葉 法哲学年報一九七六『法哲学と実定法学』 有斐閣

近代法学史における市民法学と社会法学 法律時報四八巻五号

Formative Elements of American Legal Theory, 23 Osaka University Law Review (23 OULR).

昭和52年

法思想史研究ノート 法学セミナー二六六〜二九二号

Legal Formalism Reconsidered, 24 Osaka University Law Review (24 OULR).

昭和53年

An Interpretation of "Nature" Underlying the Law, 25 Osaka University Law Review (25 OULR).

昭和54年

尾高朝雄の法哲学 法哲学年報一九七九『日本の法哲学Ⅱ』 有斐閣

Judge as Law-Declarer? 26 Osaka University Law Review (26 OULR).

昭和55年

社会通念と法 法律時報五二巻五号

最近のアメリカイギリスの法理学 アメリカ法一九八〇—

An Essay on Human Enterprise of Law in the Modern Legal World, 27 Osaka University Law Review (27 OULR).

昭和56年

フランス・リーバーと解釈学 (編書の項の内『現代法思想の展開』所収)

海外諸理論の受容と変容について 井上茂教授還暦記念『現代の法哲学』 有斐閣

生活世界の法構造 法学教室四号

T. Otake's Phenomenological Sociology Applied to Legal and Political Philosophy, 28 Osaka University Law

Review (28 OULR).

昭和57年

法・国家の柔構造的把握をめぐる一系列——尾高とディルタイ—— 大阪大学創立三〇周年記念『法と政治の現代的課題』

Law and Shakai-tsunen as a Legal Form of Consensus Idea, 29 Osaka University Law Review (29 OULR).

昭和58年

人間と法——歴史的見地からみたそのメタモルフォゼ—— 岩波講座・基本法学第一巻『人』

早稲田法哲学の伝統 早稲田法学五八巻二号

医療をめぐる法と倫理 唄孝一編『医療と法と倫理』 岩波書店

法文化——伝統と現在 思想七一三号(十一月号)

昭和59年

イギリス法近代化・現代化過程におけるパタナリズムと自由人 阪大法学一三〇号

Das Erfassen gesellschaftlicher Beziehungen im Zusammenhang mit der Ordnungsbedürftigkeit und-möglichkeit als rechtssoziologisches Problem Japanisches und europäisches Rechtsdenken-Versuch einer philosophischer Grundlagen, Straniak-Symposium, Luzern, 1984

昭和60年

法の近代化・現代化過程における伝統と価値 阪大法学一三三・一三四合併号

Legal Culture in Japan-Modern and traditional, in: 23 Beheft, ARSP (Tradition und Fortschritt in den modernen Rechtskulturen), 1985.

Law and Liberalism in the Process of Modernization of JAPAN, Read and Discussed at the "Conference on Varieties of Liberalism" Held at Princeton University, 1985.

昭和61年

法をめぐる異文化相互の距離と接合 法哲学年報(東西法文化特集)

昭和62年

Feeling and Reason as a Recurrent Topic of Legal Culture, 34 Osaka University Law Review (34 OULR). 終

22 UBC Law Rev. 1988.

Theory, Institution, and Practice as a Topic of Legal Culture, 34 Osaka University Law Review (34 OULR).

法思想とその慣行的文脈 阪大法学一四一一—二合併寛道豊治教授退官記念号

The Acceptance and Application of Max Weber's Ideas of Law and Legal Thinking in Japan (編書①項①内

30 ARSP Beihft 所収)

医療技術をめぐる法と倫理 法律時報五九卷一一号

昭和63年

現代における科学・技術の発展と法の役割変化 成城法学一七号

平成2年

法の風土と法理論 成城教育七〇号

自然との関係における医療・法・人格 日本医学哲学・倫理学会雑誌八号

平成3年

Can and Should the Law Respond to Our Society's Technological Needs? in: Technischer Imperativ und

Legitimationskrise des Rechts, herausg. von W. Krawietz, et al, 1991.

ヒト・制度・自然の交錯のなかで 比較法史研究二『歴史と社会のなかの法』 未来社

平成5年

Law, Nature and Reason in Our Quickly Changing Society, in: ARSP Beiheft 51, Rechtssystem und praktische Vernunft, herausg. von R. Alexy, et al, Steiner, 1993.

一九世紀末の日本人たちは西洋法思想をどう受けとめたのか 成城法学四四号

近代契約理論の思想的背景 加藤一郎・矢崎・他による近代契約理論研究会の成果の一部

「生」について 法哲学年報『生と死の法理』 有斐閣

平成6年

人間の生きることと法思想——変わらない法思想なんてあるだろうか—— 成城法学四六号

Francis Lieber on Legal Hermeneutics: A Note on Legal Thought in 19th Century in America and Japan, in: Rechtsnorm und Rechtswirklichkeit-Festschrift für Werner Krawietz zum 60. Geburtstag-, herausg. von A. Aarnio, et al, Duncker & Humblot, 1994.

Modern Legal Thought through Japanese Eyes at the End of 19th Century, in: ARSP Beiheft, in print.

一七世紀の法思想家たち「クック、セルデン、ヘイルの場合——H・J・ブーマン教授の近稿をめぐって 比較法史研究 4

IV 翻 訳

昭和34年

マックス・ウェーバー『法社会学』（小野木常編訳の内共訳） 日本評論社

昭和37年

グスタフ・ラートブルフ「ライヒ司法省の名声と終焉」および「人道に対する犯罪をめぐる議論について」（福田

平と共訳）

『ラートブルフ著作集第五巻』

東京大学出版会

昭和40年

フランツ・ポルケナウ『封建的世界像から市民的世界像へ』（水田洋ほかと共訳）

みすず書房

昭和46年（〜47年）

カントロヴィッチ・パターソン「法学方法論（一）」（二）」（矢崎編・法理学読書会訳）

阪大法学七九号、八〇号

昭和51年

H・L・A・ハート『法の概念』（監訳）

みすず書房

平成2年

H・L・A・ハート『法学・哲学論集』（矢崎・松浦好治ほか訳）

みすず書房